

令和 5 年 3 月
沖縄赤十字病院医学雑誌
第28巻，第 1 号 別刷

顎裂部骨移植術を受ける患児の 不安・恐怖の軽減への援助

—手術を受ける患児と保護者へのプレパレーションの実践効果について—

砂川 優樹，赤嶺佳奈子，末吉 保子，名嘉 剛

顎裂部骨移植術を受ける患児の不安・恐怖の軽減への援助 —手術を受ける患児と保護者へのプレパレーションの実践効果について—

砂川 優樹, 赤嶺佳奈子, 末吉 保子, 名嘉 剛

沖縄赤十字病院 手術室

要 旨

小児は発達過程にあり理解力に乏しく、自己コントロールも十分でないため成人に比べ治療における精神的ストレスが大きい。手術は治療中最もストレスが高くなる瞬間の1つであり、そのストレスのために治療後や退院後も情緒障害や異常行動を呈することがあるため、周術期の児のストレスを軽減することが重要である。そこで、幼児期に手術を経験し、顎裂部骨移植術を受ける学童期にあるA児と母親へプレパレーションを実施した結果から、学童期にある患児の手術に対する心理的準備や対処能力を高めるために効果的なプレパレーション方法と今後の課題について検討した。

Keywords : 学童期, 手術看護, プレパレーション

はじめに

小児は発達過程にあり理解力に乏しく、自己コントロールも十分でないため成人に比べ精神的なストレスが大きい。また、住み慣れた環境から病院に入院するだけでも負担になるうえ、検査や処置も苦痛を伴うものである。手術はその積み重ねの上に位置するため最もストレスの高くなる瞬間である¹⁾。そのストレスのために治療中だけでなく術後や退院後も情緒障害や異常行動を呈することがあるため、周術期の子どものストレスを軽減することは重要である¹⁾。そのためには、術前の緊張緩和、スムーズな麻酔導入、術後の痛みや抑制からの解放などが必要となる¹⁾。さらに親の不安は子どもに伝播し子どもの精神状態に様々な影響を及ぼす¹⁾ため、親の手術に対する理解や安心を得ることも重要である。今回、幼児期に手術を経験し、顎裂部骨移植術を受ける学童期にあるA児と母親と術前から術後まで一連を通してかかわる機会を得た。学童期の子どもは十

分な説明を受けることにより、原因と結果を結びつけて理解し、先を見通せるようになる²⁾。そこで、A児の発達、理解力に合わせたプレパレーションを実施した結果から、学童期にある患児の手術に対する不安軽減のために有効な看護について考察することとした。

I. 目的

幼児期に手術を経験し、顎裂部骨移植術を受ける学童期にあるA児と母親との術前から術後までの一連を通した関わりから、学童期にある患児の手術に対する心理的準備や対処能力を高めるために効果的なプレパレーション方法と今後の課題について検討する。

II. 方法

研究対象：A児，8歳8ヶ月，女兒。左側唇顎裂に対し、全身麻酔，眼窩下神経ブロック，腹横筋膜面ブロック下に顎裂部自家腸骨海綿骨移植術を施行。0歳3ヶ月で口唇形成術，5歳9ヶ月で口唇外鼻修正術を経験している。

(令和4年9月30日受理)
著者連絡先：砂川 優樹
(〒902-8588) 沖縄県那覇市与儀1-3-1
沖縄赤十字病院 看護部

研究期間：20XX年 7月～8月

研究方法：立案した看護計画に沿って術前麻酔科外来、術前訪問、手術当日、術後訪問の一連を通して看護を実践し、得られた結果を文献と照らし合わせ分析する。

III. 倫理的配慮

本研究は、B病院の研究倫理委員会に代わる看護部教育委員会の承認を得て行った。研究対象者の個人情報に対して、情報の保護及びプライバシーの厳守を行い、研究対象者が特定されないようにデータの取り扱いを厳重に行った。また、データは本研究にのみ使用し、それ以外の目的で使用しない。

IV. 結果

〈術前麻酔科外来〉

A児に手術室や看護師の雰囲気慣れてもらうこと、信頼関係の構築、手術室看護に必要な情報の収集を目的とし、実際の手術着を着て話を聞いた。A児は母親とともに来院し、大好きな漫画を読みながら待っていた。まずは、A児がリラックスできる雰囲気作りや信頼関係構築のために、読んでいる漫画や好きなキャラクターなどの話をしてから検温や問診票の確認を行った。A児は終始落ち着いた様子であったが、時折母親の手を握るなど緊張した様子も見られた。日常生活や学校生活の話も交え、A児や母親の手術に対する理解や思いを把握するためコミュニケーションを図った。絵を描くことが好きだという発言があり、母親からも「家でもずっと絵を描いている」という発言があった。また、A児は口の手術をすることを理解しており、本人と母親ともに手術を行うことを否定的に捉えている様子ではなかった。しかし、前回の手術が怖かったと発言があり、母親は「前回の手術の後、喉が渴いて暴れたことで、点滴のところが血で滲んでしまって、先生に相談して少しお水で潤してもらった。あと、点滴している手が動かなかったみたい。」と話された。

〈術前訪問：手術前日〉

訪室時、A児の緊張を和らげることを意識し、絵やアニメなどA児の好む話題でコミュニケーション

を図った。A児は自ら、描いた絵や好きなアニメの小物やぬいぐるみなどを嬉しそうに見せてくれた。そこで、手術室入室時の不安軽減のため、翌日A児が好きなものや、あると安心するものを何か1つ持参して良いことを伝えた。手術のことで緊張しているかと尋ねると、「うーん」と首を傾げて答えたが、表情の硬さからやや緊張感がみられたため、A児の気持ちや表情を確認しながら、手術当日の流れについて、事前に文章や漢字を既習した内容に変換イラストを添付したパンフレットを用いて説明した。手術室の環境や手術に対する不安軽減のために、入室時は前投薬を投与し、眠っている間に手術や注射は行うため痛くないことを説明した。また、実際に使用するモニターコードや麻酔用マスクに触れてもらい痛いものではないという理解を得た。さらにマスクへの抵抗感を軽減するためマスクに好きな絵を描いてもらい、麻酔ガス吸入時の呼吸法を練習した。術後疼痛軽減に向けて、創部痛が和らぐようブロック注射を行うこと、痛みはいつでも伝えて良いことを説明した。さらに、挿管チューブによる喉の痛みや渴きを感じる可能性があることと術後しばらく飲水ができないこと、口蓋や点滴固定用シーネを装着していることを理由とともに説明し、口渇感やシーネを受容できるよう関わった。同時に母親へも不安や疑問の有無を確認したところ、神経ブロック用カテーテル留置の有無とその効果の持続時間に関して質問があり、カテーテルを留置する予定であること、主治医や麻酔科医からの説明と同様に2～3日痛み止めの効果があることや術後3日目頃から痛みが和らいでくることを説明し理解を得られた。

〈手術当日〉

入室時、お気に入りのぬいぐるみを抱いて母親と共に来たA児は前投薬による鎮静下にありながらも自身で名前と生年月日を言うことができた。マスクの絵について褒めると「寝る前パンフレットを見返してマスクの練習もできた」と母親から発言があった。A児へ「偉いね、じゃあ練習したこと一緒に頑張ろうね」と声をかけると「うん」と頷いた。A児は落ち着いた表情で母親に手を振って別れスムーズに入室ができ、入室後、モニターコードやマスクへ

の拒否は見られず、練習した呼吸法を実践できスムーズな麻酔導入ができた。抜管時も暴れることなく指示動作への反応も良好で、痛みがないことを自ら伝えることができた。術後、A児の頑張りを労い、迎えに来た母親へA児が練習したことができていたことや落ち着いていてスムーズに進行できたこと、後日また訪室すること伝えた。

〈術後訪問：術後3日目〉

カルテより、A児が術後すぐ喉の渇きを訴えてぐずり水分を欲したものの、病棟看護師の腹鳴がないためまだ飲水ができないという説明に納得し我慢できたことがわかった。尿留置カテーテルや腹横筋膜面ブロックカテーテルの抜去、常食が開始されたことを確認し、術後訪問を実施。まずはA児の頑張りを労い、術前に説明したことや練習したことが上手にできていたことを話すと表情を緩ませて微笑んだ。「歩いたらまだ痛い」と創部痛への不安があるようでトイレへは車椅子で移動していたが、ベッド上では痛みなく過ごしていた。カテーテルからの痛み止めの効果について母親へ尋ねると「やっぱりこのチューブが入っていてよかった。前回の入院の際、隣の子が今回と同じ手術をしてすごく痛がっていて、こう言う痛み止めもしてなかったんで、この子もそうなるのかなって心配だった。」と話され、カテーテル留置に対し術前に気にしていた理由を知ることができた。また、A児へ緊張したかを尋ねるとA児は「うーん、わかんない」と話したが、母親から「言葉にはしなかったが、多少緊張はあったように思う」と話してくれた。シーネを嫌がる様子はなく、このあと点滴を抜去することを話すと「やっと折り紙できる」と嬉しそうにしていた。最後は改めてA児と母親へ労いの言葉をかけ術後訪問を終了した。

V. 考察

小児は成人とは異なり常に成長・発達し続けているが、認知機能の発達途上にある小児は手術の必要性を理解したり経験のないことを予測したりすることに限界がある。漠然とした正体不明の脅威は予め知っている脅威よりもいっそう混乱を引き起こすといわれており、これから起こることをその子なりに

受け止め、それらの脅威に対処できるよう支援することにプレパレーションの意義がある³⁾。

今回A児への術前看護を実施した結果、手術室に到着後A児に不安な言動が終始見られなかったこと、練習したマスク呼吸や痛みの程度を伝えることができていたこと、5歳で受けた手術後と同様に喉の渇きを訴えたものの看護師の説明に納得し我慢できたこと、さらに口蓋シーネや点滴固定用シーネを嫌がったり暴れたりする様子はなかったことからプレパレーションの効果が認められた。

田中(2009)は「プレパレーションを効果的に行うには、子どもの年齢や性別、発達段階、心理状況などからどのような方法で行うか検討することが望ましい」⁴⁾と述べている。本事例においても、年齢や学年相当の文字や言葉の使用、過去の手術経験が及ぼす不安などの心理状況、会話の内容や読んでいる本などから予想される認知発達の程度を考慮し術前看護の方法を検討したことで、A児の発達や理解力に適した効果的なプレパレーションが実施できたと考える。特にA児が手術前夜、母親と共にパンフレットや麻酔ガス吸入時の呼吸法を振り返ることができたことから、パンフレットや指導内容は看護師がその場にいらなくても理解できるものであったと評価し、対象の理解力に適していたと考える。

また、「初めて子どもと接するときその子の年齢に合わせた話題でかかわることは、その反応で子どもと話ができるか否かの判断となる¹⁾。」と並木等が述べているように、A児との関わりを通して、趣味や興味、日常生活に関する話題を提供したことで、それらが会話のきっかけとなり、A児自ら話したりこちらの話を集中して聞いてくれるといった信頼関係の構築に繋がったことに加え、A児の話方や言葉遣い、反応から認知や理解力の程度を判断することができたのではないかと考える。

さらに土蔵等は「母親の不安は子供の不安定につながるので、子どもの手術にあたっては重要他者である母親を安心させることが重要になる⁵⁾。」と述べており、今回私も母親の思いを確認するなど不安軽減を意識して関わった。母親は、術前から何度も術後疼痛に対して気にしている様子がうかがえ、麻

酔の方法や効果を説明することで理解を得られ、結果的に母親が考える最善の麻酔方法の選択を支援できた。しかし、術後訪問で話してくれたような具体的な不安の内容を術前で把握できれば、より早く不安軽減に繋がりさらなる母親のストレス軽減、延いてはA児のストレス軽減へとつなげることができたのではないかと考える。

また、須田等は「できる限り当日の担当看護師が、事前にベッドサイドを訪問して小児や家族と会うようにする。見知らぬ手術室に入ったとき、初対面ではない看護師がいることで、少しでも小児の不安を軽減することにつながる⁶⁾。」と述べている。今回、手術室入室から退室までA児に拒否や不安な言動は見られなかったことから、術前麻酔科外来から同じ看護師が関わったことは手術室におけるA児の不安軽減につながった要因の一つではないかと考える。また、外来から同じ看護師が関わることは、看護師にとっても情報を得る機会が増えることに繋がり、そこで得た情報はA児の不安軽減のための看護を検討したり、落ち着ける雰囲気をつくるうえで有用であった。このことから術前から同じ看護師が関わることは、患児の手術に対するストレスを軽減するために有効であると考ええる。

最後に、本事例ではA児や母親と麻酔科外来から密にかかわったことでより具体的な情報が得られたが、すべての事例でそれが可能であるとは言い難い。そのような中でより継続性のある看護を実施するためには、病棟や外来、連携室など各部署との連携を強化していく必要があると考える。また、本事例だけでなく様々な発達段階にある子供への看護事例を検討し、周術期小児看護に必要な患者情報や親しみやすい手術室環境とは何かを考え整備していくことも課題であると考ええる。

VI. 結論

1. 親子ともに過去の手術経験の印象を今回も同様に抱く可能性があるため、その経験をもとにどのような不安や要望を抱いているか確認する必要がある。
2. 子どもが手術や術後に向け心の準備ができるよ

うにするために、発達や理解力に応じたプレパレーションの実施が有効である。

3. 子どもの年齢や趣味・興味に合わせた話題でかわかることは、信頼関係構築や理解力を判断するために重要である。
4. 術前から手術当日の担当看護師が関わることで、手術室における子どもの不安軽減につながる。

VII. 引用文献

- 1) 並木昭義, 川名信: 小児麻酔と周術期看護 より質の高い周術期看護を目指して, 真興交易(株) 医書出版物, 11-65, 2009
- 2) 森浩美, 飯崎あずさ, 佐々木俊子: 短期入院で計画手術を受けた学童期の子どもの思い, 日本小児看護学会誌Vol.27, 27-35, 2018
- 3) 二宮啓子, 今野美紀: 小児看護学概論改訂第3版 子どもと家族に寄り添う援助, 南江堂, 260-261, 2021
- 4) 田中恭子: プレパレーションの5段階について第55回日本小児保健学会(北海道)シンポジウム3 小児保健とプレパレーション~子どもの力と共に~, 日本小児保健協会, 173-176, 2009
- 5) 土蔵愛子, 草柳かほる: こころに寄り添う手術看護 周術期患者・家族の心境とケア, 医歯薬出版株式会社, 21, 2014
- 6) 須田和子, 菅家智代, 金田知子他: 周手術期におけるプリパレーションの実際, 小児看護25(2), 158-165, 2002